

A. 聖書解釈と政治思想**オリエンテーション****導入：脳神経科学とキリスト教****1. 聖書の政治思想とキリスト教社会主義**

1-1：古代イスラエルと政治—契約・法・王権

1-2：イエスの宗教運動

1-3：パウロとローマ帝国

1-4：近代社会とキリスト教社会主義

5/27

1-5：宗教社会主義と解放の神学

6/3

2. 現代政治思想とキリスト教

2-1：民主主義とキリスト教

6/10

2-2：政治的なもの——アーレント、ムフ

7/1

2-3：シュミットからアガンベンへ

7/8

2-4：ジジェクとパウロ

7/15

Exkurs

現代キリスト教思想とユダヤ的なもの

6/17, 24

キリスト教と科学技術

7/22

<前回>イエスの宗教運動**(1) 聖書学の歴史——批判から懐疑へ**

1. 近代歴史学の成立→近代的知の基礎学としての歴史学

2. 19世紀におけるイエス伝研究とその挫折（シュヴァイツァーの総括）→懐疑主義

史実の Daß の肯定、しかし、歴史の Was の断念

3. ブルトマン『イエス』（未来社）

「人間と歴史の関係は、自然との関係とは違ったものなのだ」、「客観的自然観察があるという意味での客観的歴史観察はありえない」（7）、「叙述はただ歴史との絶えざる対話でしかあり得ない」（8）、「方法の主観性」（9）

「その「教説」、その宣教なのである」、「実際さしあたりは教団の宣教なのである」（16）、

「伝承の最古の層の中にある思想の複合体が私達の叙述の対象だからである。」（17）

4. 伝承史：イエス→断片的な口承伝承（弟子たち）→収集・文書化→編集

(2) イエス・ルネサンス——懐疑論を超えて

5. 過去についての知を断念できるか？あるいは過去についての知はどの程度修正可能か（歴史修正主義の問題）？

・ハンス・ヨーナス『アウシュヴィッツ以後の神』法政大学出版局。

「第二章 過去と真理——いわゆる神の証明にたいする遅ればせの補遺」

6. イエス・ルネサンス：

一九七〇年代に遡る、サンダース、ジョージアン、ホースレイ、マック、ボーグ

「イエスを教師として、特に世間を覆すような知恵の教師として新たに理解する」（29）

「イエス当時の社会的世界に対する関心が急激に高まっている」（31）

「イエスの言葉を中心にして方法論を展開するなら、徹底した史的懐疑主義に陥ることは避けられない。イエスの言葉を直接引用したものは、仮にあったとしても稀である」（34-35）

「これとは別の出発点」「宗教的人物の類型論（宗教史学、人類学、宗教心理学から引き出される）に慣れ親しむことであり、これによって啓発的な地の利が得られるのである」

宗教的個性：カリスマ的な「聖なる人」、「賢者」、「預言者」、「復興運動の創始者」

「文化横断的類型論によって先ずモデルが決められ、次にそれが福音書本文自体の中に見いだされるものによって確証される」(35)

7. 聖書学の基本的な方法論である歴史的批判的方法は、社会科学と結びつく。

・ブルトマンにおける様式史・「生活の座」の変容。

社会学的な問いから、実存的問いへ → 社会科学的問題からの分離

・社会学的問いへの回帰

8. G・タイセン『原始キリスト教の社会学』ヨルダン社。

(3) クロッサンの聖書学

9. 方法論、あらゆる方法を駆使すること

(4) イエスの宗教運動の政治性

10. 「神の国」というキーワードをいかに解釈するか

キリスト教神学と同様に、聖書学においても、「イエス」は常に研究者の中心となる関心を占めてきた。→歴史的イエスの探求、「神の国」「終末論」の問題。

13. ジョン・ドミニク・クロッサン『イエスとは誰か——史的イエスに関する疑問に答える』新教出版社、2013年。

「神の王国」とは、皇帝（カエサル）ではなく神が玉座に就いた世界、皇帝（カエサル）ではなく神が公明正大に支配する世界、という意味です。宗教概念であると同時に政治概念なのです。そして倫理概念であると同時に経済概念なのです。」(62)

「神の王国の分け隔てない平等な性格の象徴として、イエスは開かれた食卓の伝統を残しました。その後、特定のキリスト教徒集団が最後の晩餐を儀礼に仕立てて、あの解釈の伝統にイエスの死の記念を付け加えたのです。」(78)

「癒し」「あれは同情に基づくただの個人的な行為ではなくて、既成の社会構造とは別な神の王国の雛形を作る手段です。」(81)

「イエスは、ローマの植民地化と都市化に疲れ切った農村社会を元気にするつもりでした。そのために、正義の神の完全に平等な理想の王国を宣言したのです。」(109)

「開かれた食卓と無償の癒しをイエスは実践しました。彼の伝道は基本的に、挑発と委ね合いという生き方に人を招くことだった、と思います」、「神との直の触れ合いを参加者に委ねる共同生活のためのものでした。」(112)

「貧困と一文無しの恐ろしい境い目」、「ローマが都市化を進める中で、農民に重くのしかかりました」、「イエスは黙示的な癒しを共有するネットワークを作ったのではないでしょうか」(114)

「犬獣派は自足を重んじますが、イエスの伝道者は共同体への依存を重んじるのです」(117)

「犬獣派は都会的で、イエスは農村的でした」、「イエスの送り出す放浪の伝道者と、それを迎え入れる定住者の間には、相互作用が見られます。イエスの計画は、土地を失った一文無しとまだ生計を立てられる貧乏人の恐ろしい境界線をまたぐ農民運動だったと私は思うのです」(118)、「貧困の背景には、一世紀初めのパクス・ロマーナの好景気がありました」(118-119)、「都市が農民の生活や周囲の土地に何をしましたでしょうか」、「イエスは草の根から農民の生活を建て直そうと計画したのです。神の王国は、放浪者のもとだけではなく、放浪者と定住者との相互関係のもとに存在します」、「一方には食卓が要るし、一方には癒やしが要る」(119)

1. 聖書の政治思想

1 - 3 : パウロとローマ帝国

（1）パウロ——迫害者から使徒へ

1. パウロの思想的背景：ヘレニズム・ユダヤ教と都市的状況

- ・様々な思想的な文脈が交差している。ギリシア語訳聖書の存在。
- ・30頃:エルサレム教会の成立 66:ローマの大火事、皇帝ネロのキリスト教迫害
66-70:第一次ユダヤ戦争（132-135:第二次）

2. 迫害者から異邦人への使徒への召命（復活のキリストとの出会い）

↓

地中海世界の伝道旅行、都市から都市へ伝道するキリスト教徒の存在
急速な拡大（点から点へ）

3. エルサレム教会・ユダヤ的キリスト教（ユダヤ教イエス派）

とヘレニズム的キリスト教

律法遵守は救済の条件か、救われるためにはユダヤ人になる必要があるか

しかし、これは後の反ユダヤ主義とは別問題。

「この段階では反ユダヤ主義ともユダヤ人差別とも言えません」、「そのヨハネにしてもユダヤ人と非ユダヤ人を区別していたとは思えません」、「ところが四世紀にローマ帝国がキリスト教を国教にしたとき、まさにあの磔刑物語がキリスト教徒にユダヤ人を責め立てる口実を与えてしまい、ヨーロッパの命取りになる恐ろしいホロコースト時代を準備する長い歴史が始まります。」（クロッサン、141）

<聖書テキスト>

・「キリスト・イエスの僕、神の福音のために選び出され、召されて使徒となったパウロから」（ローマ 1.1）→「どうか、わたしのために、わたしと一緒に神に祈って下さい、わたしがユダヤにいる不信の者から守られ、エルサレムに対するわたしの奉仕が聖なる者たちに歓迎されるように」（ローマ15. 30-31）

・「異邦人のためにキリスト・イエスに仕える者となり、神の福音のために祭司の役を務めているからです。」（ローマ 15:16）

・「16 わたしは福音を恥としない。福音は、ユダヤ人をはじめ、ギリシア人にも、信じる者すべてに救いをもたらす神の力だからです。17 福音には、神の義が啓示されていますが、それは、初めから終わりまで信仰を通して実現されるのです。「正しい者は信仰によって生きる」と書いてあるとおりです。18 不義によって真理の働きを妨げる人間のあらゆる不信心と不義に対して、神は天から怒りを現されます。19 なぜなら、神について知りうる事柄は、彼らにも明らかだからです。神がそれを示されたのです。」（ローマ 1）

・「6 わたしたちの古い自分がキリストと共に十字架につけられたのは、罪に支配された体が滅ぼされ、もはや罪の奴隷にならないためであると知っています。7 死んだ者は、罪から解放されています。8 わたしたちは、キリストと共に死んだのなら、キリストと共に生きることにもなると信じます。9 そして、死者の中から復活させられたキリストはもはや死ぬことがない、と知っています。死は、もはやキリストを支配しません。10 キリストが死なれたのは、ただ一度罪に対して死なれたのであり、生きておられるのは、神に対して生きておられるのです。11 このように、あなたがたも自分は罪に対して死んでいるが、キリスト・イエスに結ばれて、神に対して生きているのだと考えなさい。」（ローマ 6）

- ・「だから、わたしたちは落胆しません。たとえわたしたちの「外なる人」は衰えていくとしても、わたしたちの「内なる人」は日々新たにされていきます。」(2コリント 4:16)
- ・「だから、キリストと結ばれる人はだれでも、新しく創造された者なのです。古いものは過ぎ去り、新しいものが生じた。」(2コリント 5:17)

(2) パウロ・ルネッサンス

5. アメリカの聖書学会 (SBL) の「聖書と帝国」分科会 (*The Bible and Empire Unit*)
パウロ・ルネッサンス、イエスからパウロへ
6. Richard A. Horsley (ed.), *Paul and the Roman Imperial Order*, Trinity Press International, 2004.

Introduction (Richard A. Horsley)

Protestant interpreters have traditionally understood Paul in opposition to Judaism. Luther's discovery of "justification by faith" in Paul's Letter to the Romans, the solution to his frustrating quest for a sense of righteousness, became the formative religious experience through which Paul's letters have been read. Paul became the paradigmatic *home religiosus* whose quest for salvation by a compulsive keeping of the Law in his native Judaism drove him to his dramatic conversion to God's grace manifested in Christ.

This approach to Paul that has dominated NT studies for generations is based on the unquestioned and distinctively modern Western assumptions that Paul is concerned with religion and that religion is not only separate from political-economic life, but also primarily a matter of individual faith. (1)

in the aftermath of the Holocaust

the great hero of faith who articulated foundational Christian Theology was discovered to share the same fundamental "covenantal nomism" of Judaism,

Paul's new religion of personal faith was no longer seen as sharply opposed to Judaism. (2)

7. 西洋的キリスト教会の神学的基盤としてのパウロ
パウロへの反発・パウロ批判、体制的イデオロギーの代表
8. 新しいパウロ解釈：1980年代以降
体制派パウロから戦うパウロへ
政治哲学におけるパウロへの注目

「そこではもはや、ユダヤ人もギリシア人もなく、奴隷も自由な身分の者もなく、男も女もありません。あなたがたは皆、キリスト・イエスにおいて一つだからです。」(ガラテヤ 3:28)

「パウロの神学の社会革命をひき起こす潜在力を秘めていた」「ユダヤ人と異邦人の一体化」(サンダース、24)

「レーニン主義者パウロ」「アウトカーストの共同体」「無制約的な普遍主義への関係にもとづいて形成された戦う共同体」(ジジェク『操り人形と小人』青土社、195)

9. 現代思想におけるパウロ → バディウ、アガンベン、ジジェク
古代の歴史的思想的文脈におけるパウロ
ユダヤ思想の文脈におけるパウロ
聖書学的議論(従来の閉鎖的な議論に対して)への新たな問題提起

(3) パウロと政治哲学

10. 「政治神学への向けたパウロ」あるいは「パウロから政治神学へ」

11. タウベス

Erstens kennt er die Gemeinde nicht, weiß nur von ihren Konflikten, Heidenchristen / Judenchristen, die dort akut sind, und natürlich ist es das politische Genie des Paulus, daß er nicht irgendeiner Gemeinde schreibt, sondern der Gemeinde in Rom, dem Sitz des Welt-Imperiums. Er hatte Sinn dafür, wo die Macht zu finden ist und wo eine Gegenmacht zu etablieren ist. . . . Man kann sich der These von Johannes Munck anschließen oder nicht, daß dieses "Einsammeln" ein reales Einsammeln der Völker, auf das dann in der Tat die Parusie kommt. (26)

Ich will betonen, daß das eine politische Kampfansage ist, wenn an die Gemeinde nach Rom ein Brief, der verlesen wird, von dem man nicht weiß, in wessen Hände der fällt, und die Zensoren sind keine Idioten, mit solchen Worten eingeleitet wird, und nicht anders. Man könnte ja pietistisch, quietistisch, neutral oder wie auch immer einleiten; aber nichts davon. Meine These ist deshalb: In diesem Sinne ist der Römerbrief eine politische Theologie, eine politische Kampfansage an den Cäsaren. . . . Er(Bruno Bauer) hat etwas gesehen, daß nämlich die christliche Litertur eine Protestliteratur gegen den florierenden Cäsarenkult ist. (27)

Gesetzesbegriff, Kompromißformel war für das Imperium Romanum. religio licita
eine allgemeine hellenistische Aura, eine Apotheose des Nomos.

das Gesetze als Hypostase (36)

eine Missionsphilosophie in Gestalt dieser Nomos-Theologie

Nomos, Thora, Weltgesetz, Naturgesetz

Er strampelt sich raus aus jenem Konsensus zwischen griechisch-jüdisch-hellenistischer Missionstheologie, (37)

Sondern das ist jemand, der dasselbige ganz anders, nämlich mit dem Protest, mit einer Umwertung der Werte beantwortet: Nicht der Nomos, sondern der ans Kreuz Geschlagene durch den Nomos ist der Imperator. Das ist ungeheuerlich, und dagegen sind alle kleinen Revoluzzer doch nichtig! Dieser Umwertung stellt jüdisch-römisch-hellenistische Oberschicht-Theologie auf den Kopf, den ganzen Mischmasch des Hellenismus. Gewiß, Paulus ist auch universal, aber durch das Nadelöhr des Gekreuzigten, und das heißt: Umkehrung aller Werte dieser Welt. Also schon gar nicht der Nomos als summum bonum. Deshalb ist das politische Ladung, allerhöchster Explosivstoff. (38)

< I コリント >

1:18 十字架の言葉は、滅んでいく者にとっては愚かなものですが、わたしたち救われる者には神の力です。19 それは、こう書いてあるからです。「わたしは知恵ある者の知恵を滅ぼし、／賢い者の賢さを意味のないものにする。」20 知恵のある人はどこにいる。学者はどこにいる。この世の論客はどこにいる。神は世の知恵を愚かなものにされたではないか。21 世は自分の知恵で神を知ることができませんでした。それは神の知恵にかなっていません。そこで神は、宣教という愚かな手段によって信じる者を救おうと、お考えになったのです。22 ユダヤ人はしるしを求め、ギリシア人は知恵を探しますが、23 わたしたちは、十字架につけられたキリストを宣べ伝えています。すなわち、ユダヤ人にはつまずかせるもの、異邦人には愚かなものですが、24 ユダヤ人であろうがギリシア人であろうが、召された者には、神の力、神の知恵であるキリストを宣べ伝えているのです。25 神の愚かさは人よりも賢く、神の弱さは人よりも強いからです。

12. Rollin A. Ramsaran, Resisting Imperial Domination and Influence. Paul's Apocalyptic

Rhetoric in 1 Corinthians.

Studies of Greco-Roman rhetoric have done much to illuminate how Paul draws on the standard rhetorical forms in formulating the arguments in his letters. Yet how Judean apocalyptic traditions inform or possibly provide the backbone to Paul's arguments have not been adequately examined. Paul moves between two rhetorical registers, that of the Jewish apocalypticist and that of the Greco-Roman rhetor. Indeed, this investigation of 1 Corinthians may suggest that Paul "mixes" registers, as presumably has already happened in his personal history as a Diaspora Jew and, more recently, as one called by Christ as an apostle to the Gentiles. (89)

The story of the crucified Christ reveals the divine condemnation and imminent destruction of the imperial rulers, power relations, aristocratic codes, and unrighteous influences embedded in the ruling structures; it provides renewal and power for the faithful people of God; and it sets a pattern for the vindication and transformation of the faithful, including martyrs. Paul clearly combines two registers, that of the Jewish apocalypticist and that of Greco-Roman rhetoric. Attention to both registers is necessary for gaining a clearer picture of Paul's persuasive techniques. Paul's apocalyptic rhetoric in 1 Corinth by casting his deliberative argument into the larger framework of God's intervention through judgment and renewal. (100)

This chapter (1 Cor 15) is the "climax" of the letter because it is the climax of the "story," pointing both to the "final triumph [and renewal] brought by God" and to a courageous moral stance in the face of death-dealing powers (15:30-31), which brings assurance of participating in God's final triumph over, and renewal of, the present order. (101)

<参考文献>

1. 佐竹明『使徒パウロ—伝道にかけた生涯 (新版)』NHKブックス。
2. G. ボルンカム『パウロ—その生涯と使信』新教出版社。
3. E. ケーゼマン『パウロ神学の核心』ヨルダン社。
4. E. P. サンダース『パウロ』教文館。
5. 荒井献編『パウロをどうとらえるか』新教出版社、1972年。
6. 宮田光雄『国家と宗教—ローマ書十三章解釈史=影響史の研究』岩波書店、2010年。
7. Dieter Georgi, *The Opponents of Paul in Second Corinthians. A Study of Religious Propaganda in Late Antiquity*, T & T Clark, 1987.
 , *Theocracy in Paul's Praxis and Theology*, Fortress Press, 2009.
8. Jacob Taubes, *Die politische Theologie des Paulus*, Wilhelm Fink Verlag, 1993. (ヤーコプ・タウベス『パウロの政治神学』高橋哲哉・清水一浩訳、岩波書店、2010年。)
9. Riachrd A. Horsley, *Paul and Empire. Religion and Power in Roman Imperial Society*, Trinity Press International, 1997.
10. David G. Horrell, *An Introduction to the Study of Paul* (Second Edition), T & T Clark, 2006.
11. Steven J. Friesen, Daniel N. Schowalter, and James C. Walters (eds.)
 Corinth in Context. Comparative Studies on Religion and Society, Brill, 2010.
12. John Milbank, Slavoj Žižek, Creston Davis with Catherine Pickstock, *Paul's New Moment. Continental Philosophy and the Future of Christian Theology*, Brazos Press, 2010.
13. Theodore W. Jennings, Jr., *Outlaw Justice. The Messianic Politics of Paul*, Stanford University Press, 2013.